



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	苗族史の近代（続篇）
Author(s)	吉開，将人
Citation	北海道大学文学研究科紀要，127，81(右)-121(右)
Issue Date	2009-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35666
Type	departmental bulletin paper
File Information	YOSHIKAI.pdf



苗族史の近代（続篇）

《目次》

はじめに

一、苗族先住説の論理——漢族西來說との相関

二、苗族史論の系譜——西欧東洋学から日本東洋学へ

(1) 苗族先住説・漢族西來說の形成

(2) 中国通史・東洋史の編纂と漢族西來說・苗族先住説

(3) 教科書に見る上古史認識・西來說の多様性

(4) 文明史論と苗族先住説

(5) 苗族先住説と田能村梅士

(6) 苗族先住説と高楠順次郎

吉
開
将
人

苗族史の近代（統篇）

(7) 苗族先住説と鳥居龍蔵

(8) 日本における苗族先住説・漢族西來說の消長

〔以上、前篇〕

三、近代中国の苗族史論——「同化」「排除」と清末民族論

〔以下、本篇〕

(1) 清末上海における「普遍史」的民族史論

(2) 中国知識人と「苗」認識

(3) 苗族先住説の発見——梁啓超に見る先住民史観の受容

(4) 近代啓蒙思想としての苗族先住説——衰亡の歴史と「同化」の論理

(5) 「排滿」主義者の民族史観——「排除」の論理

(6) 苗族先住説をめぐる論争

(7) 清末苗族史論の歴史的意義

四、「五族共和」と苗族先住説——苗族史論のゆくえ

〔以下、再統篇〕

(1) 辛亥革命と苗族史論

(2) 西來說の再生と土着史観の形成

(3) 苗族エリートと苗族先住説

(4) 重慶政府と西南民族

(5) 共産党政権と苗族史論——国共内戦から人民共和国へ

五、まとめ

前稿では、十九世紀の西欧東洋学における苗族先住説・漢族西来説の形成について概観した上で、明治期の日本における両学説の受容とそれに関わる学術史的展開について整理を試みた。⁴⁴ 本稿では、同時代の中国知識人による民族史論を検討材料として、清末における苗族先住説の受容のあり方について考察することにした。

三、近代中国の苗族史論——「同化」「排除」と清末民族論

近代中国の知識人による民族史論を近代日本のそれと比較した場合、最も顕著な差として認められるのは、各種の民族史論やそれを支える近代的「学知」が、国内の政治変革運動と結び付くかたちで競って受容され、社会的に大きな影響力を持ったという点である。明治日本では東洋学の知識体系の一部を構成したに過ぎなかった苗族先住説も、清末の中国知識人にとっては現実の政治体制論と密接な関係を持つものとして展開したのである。

(1) 清末上海における「普遍史」的民族史論

「正史」と呼ばれる編纂史料の存在に象徴されるように、前近代の中国では王朝交替に際して「正統」の継承を重視する伝統的な歴史観が主流であり、またその民族観も「華夷思想」として知られる固有の世界観の上に成り立ったものであった。黄帝を初めとする上古の帝王や、それらに対立した存在としての蚩尤や三苗に関する古典の記述についての考証学的議論はあっても、こうした伝統的歴史観や世界観に立つ限り、それらが外来か先住か、さらには異なる民族集団であるか否かという問いは、決して生まれることはない。前稿で論じた明治日本の場合と同様に、中国にお

いても、苗族先住説と漢族西来説に立脚した民族史論が初めて紹介されたのは、西欧知識人によるキリスト教的「普遍史」の文脈においてであった。

その一例、一八八一年に上海でスコットランド人宣教師のウィリアムソン（Alexander Williamson、韋廉臣）が漢語訳で出版した『古教彙参』には、以下のような記述が見える。

エデンはインドの西北の地にあつた。……アダムとエバは罪を犯した後、エデンの園を出て、エデンの園の東郊にとどまり、三十三人の息子と二十七人の娘を産んだと伝えられる。第一子はカインという名で、その次がアベルという名であつた。カインは成人するとアベルを殺し、罪を上帝に得た。上帝は「カインに」罰を下して本土から追放した。そのため、カインは家を捨てて東に去り、ノド（の地）に至りそこに暮らした。子孫は繁殖し、大きな聚落を形成し、その後さらに繁殖して、その地を離れる者がやがて現れた。ある者は東に移住し、「中国の」蚩尤と三苗の祖となり、ある者は南に移住し、インドの生人（先住民）の祖となり、ある者は西南に移住して「アフリカの」黒人の祖となった。……上帝は世の人に悪が満ち溢れるのを見て、洪水でこの世界を壊そうとし、ただアダムの子孫であるノアにのみ、方舟を用意して家族と家畜とを載せるように命じ、「洪水から」逃れさせた。『創世記』は……天下の高山がこれ（洪水）のために水没したというが、……遠方に移住したインドの生人やアフリカの黒人、アメリカの紅人（アメリカ先住民）、中国の苗人は、洪水には遭つたものの、ことごとく水没したわけではなかつた。……ノアの三人の子供は、セム・ハム・ヤベテといい、……ハムの子孫は「アララト山の」東に移住し、……その子孫のニムロドもまた移住し……、ニムロドは後に世の権力者となり、ついにその先住民を駆逐した。「先住民の」一つは西南に去り、エジプトに至つてそこに暮らし、エジプト人の祖となった。

もう一つは北經由東に向かい、中国に至ってそこに暮らし、中国人〔漢族〕の祖となった。そのため、エジプトの文字と礼制は、中国と相通じているのである。⁽⁴⁵⁾

以上の内容に見るように、十九世紀末の中国でキリスト教徒の間に流布していたのは、エデンから東へと移住した洪水前の人類としての「蚩尤」「三苗」、洪水を生き残った民族としての「苗人」、ノアの子孫として東に新たに移住した洪水後の民族としての「中国人」すなわち漢族という、「普遍史」に立脚した壮大な民族史だったのである。⁽⁴⁶⁾

しかし、こうした「普遍史」的民族史論が同時代の中国知識人に直接の影響を与えた様子は認められない。例えば、この時期の代表的中国知識人の一人である梁啓超は、おそらく『時務報』の刊行の事業で上海を身を置いた当時、遅くとも一八九六年までの段階で本書に接していたと見られる。⁽⁴⁷⁾ところが後述するように、梁啓超自身によって、初めて苗族先住説と漢族西来説に立脚した民族史論が語られるのは、日本への亡命後、横浜で執筆した「中国史叙論」(一九〇一年九月刊)である。後に彼は、来日一年を経て日本語を読めるようになり、「思想が一変した」と回顧しており、⁽⁴⁸⁾梁啓超の新たな中国史論の形成に影響を及ぼしたのは、明治日本であったと考えられる。

清末に中国知識人が著した民族史論の中で『古教彙参』の引用が確認されるのは、管見によれば、劉師培が上海で執筆した「攘書」(陰曆一九〇三年十二月序、陰曆一九〇四年三〔四?〕月刊)である。しかし、劉師培の場合も、彼がこれに前後して執筆したと見られる「中国民族志」(陰曆一九〇三年十〔十一?〕月刊)では、前稿で紹介した桑原隲蔵・白河次郎らの論著の漢訳書が専ら参照されている。⁽⁴⁹⁾清末の民族史論を主導した彼らに、最も大きな影響を与えたのは宣教師によるキリスト教的「普遍史」の著作ではなく、西欧東洋学から苗族先住説や漢族西来説を摂取した、明治日本の歴史学者たちによる「東洋史」の著作だったのである。

（2）中国知識人と「苗」認識

日清戦争の敗北を契機とした危機意識の高まりの中で、清朝への立憲君主制の導入による政治改革を目指した戊戌変法は、一八九八年に始まり、三ヶ月余りで政変によって失敗に終わる。変法運動の中心人物の一人であった梁啓超は、同年、日本へと亡命し、以後、雑誌というメディアを通して、さまざまな近代思想を広く中国社会に普及させることに力を尽くすようになった。その際には、經典的知識として広く受け入れられている歴史上の事例を引き合いに出し、抽象的な概念を中国知識人に刷り込んでいくという手法が好んで採用された。

当時の梁啓超による中国民族史に関する議論の中にも、同様な問題意識と手法が見て取れる。啓蒙思想としての社会進化論に基づく「優勝劣敗」の論理を、広く社会に提供するという目的の下に、「苗」と「中国」（漢族）を「野蠻」と「文明」の対比として取り上げ、中国と列強との関係に重ねて危機意識を煽り、政治改革を主張するという論法である。

今、わが中国四億の、公理や権限を理解しない人々が、西洋諸国と同じところに身を置けば、城を堅く堀を深くし、武器を備え食料を蓄えても、寧猛な虎が獵師に出会って生きながらえないのと同じになるだけである。……世界の進歩に際限はなく、今日の中国から西洋を見れば、中国は当然野蠻であるが、今日の中国から苗・黎・獠・獐やアフリカの黒奴、アメリカの紅人、マレーの褐色人を見れば、中国は当然文明であり、苗・黎諸種の人から禽獸を見れば、それら諸種の人とは当然文明である（「論中国宜求法律之学」一八九八年三月）。

漢より後、支那が徐々に文明に進み、優れた人種となったのは、諸人種の融合にある。融合したために並存しえたのである。今日これを見ると、支那の四億人の中に秦の戎（の子孫）……を区別できるだろうか。春秋

以前においては、内地に雑居していた者は、……種別が多く数え切れないほどであったのだが、今は一つも残っていない。すなわち劣種は戦い敗れ、ことごとく滅んでしまったのである。今なお苗種・獐種・貉種などが、優れた人種〔漢族〕と雑居して融合していないが、その残余が〔今後〕長く残ることはありえない。なぜか。融合しなければ必ず争い、争えば必ずどちらかが敗れ、勝敗の確率は、常にその優劣によると見なされるからである。今、満人と漢人のどちらが優種でどちらが劣種かという点は、言うまでもなく明らかである。そうであれば、私が「満漢の界を平らかにする」と言うのは、漢人のための計略ではなく、満人のための計略に他ならないのである（『論变法必自平滿漢之界始』一八九八年十二月）⁵⁰。

以上で見るように、日本への亡命をはさむこの時期の梁啓超には、啓蒙思想としての社会進化論に基づく「優勝劣敗」の論理を新たに受け入れながらも、漢族に対置される存在として「苗（種）」を位置付け、それを「劣種」民族（の残余）として評価し、漢族への同化融合を必然とする苗族観があったのである。

このような「劣種」としての苗族観と、それを「優勝劣敗」の進化論の枠組みに当てはめ、国人の危機意識を煽るという政治宣伝の手法は、これよりしばらく後、二十世紀初めに至るまで、同時代の多くの中国知識人の主張に共通して見られた。その一例として、日本で民族運動を牽引した陳天華による以下の主張がある。

従来、中国を滅ぼしたものは、その文明はわれわれ〔漢族〕に及ばず、その繁殖力もわれわれに及ばなかったもので、かえってわれわれに同化され、わが種族の膨張にさしさわりはなかった。しかし、今日のそれは、くらべものにならない。民族帝国主義〔民族主義を備えた帝国主義〕が次第次第におしひろまり、はじめはわれわれを奴隷とし、次ぎには牛馬のように取扱ひ、ついには草か芥なみにするのである。〔諸君は〕オーストラリア・アメ

リカの土人や中国の苗・瑤をみて「彼らを鑑として」わが身にかえりみるべきである。人口は日々に増加するが、土地は拓かれない。ヨーロッパでは、この百年の間に、人民は倍以上に急増した。本国はもはや収容する余地がなく、植民地もまた間隙がない。もとの住民が去らなければ、新たにやってきたものは、どこに居ることができようか。……今日、中国が亡びるということは、どうしてただ国が亡びるというだけであろうか。実に種族が滅亡するのである（「敬告湖南人」一九〇三年五月）^①。

十九世紀末から二十世紀初めにかけて、中国知識人のあいだに現れたこのような苗族観は、何に由来するものだったのだろうか。それを理解するには、彼らが同時代の苗族をどのように認識していたのかについて知る必要がある。

十日、……夜、宮崎「滔天」氏夫人……が、雲南省干崖土司の郝安仁が向いに住んでいるから閑なら気晴らしに訪ねたらどうかと言った。私は以前、雲南の土司が日本に来ていると聞いていたが、どこの人かは知らず、今ではじめて干崖土司であることを知った。干崖は雲南永昌府騰越庁の宣撫司で、この土人はみな苗人族であり、シャム（タイ）・ビルマの人に近い。中国の従来歴史では関連する記述が非常に少ないことから、私はこれを訪ね、様々な状況を尋ねたいと即座に希望し、宮崎氏夫人と明日ともに訪ねることにした。十一日、……郝沛生を訪問した。……私が管轄地の人民はどうかと聞くと、沛生の話では、この地の民智は開化されておらず、そのため人民はみな土人で、「自分たち」漢人はかれらを白夷と呼んでいる。……その人種の起源を溯れば、たぶんインド・チベットから来たのであろう……とのことだ（『宋教仁日記』一九〇六年十一月）^②。

この記述は、一九〇五年孫文と共に東京で中国同盟会を結成し、辛亥革命後は国民党を代表する政治家の一人となった宋教仁の、日本滞在時の日記の一節である。宋教仁は今日も苗族が居住する湖南西部の出身であり、同時代の他の

中国知識人よりは、非漢族に対する認識があつたに違いない。しかし、ここに見るように、彼は邨安仁に会つて話を聞く前では、はるかビルマとの国境地帯に暮らす辺境の民族（現僚族）を「苗人族」と認識していたのである。当時の中国知識人一般においては、「苗」が南中国の非漢族一般を漠然と指し示す概念であつたこと、そしてその実態や歴史についての理解をまったく欠いていたことが知られよう。

このことを敷衍して考えると、十九世紀末から二十世紀初めにかけて現れた、先の梁啓超・陳天華らの「劣種」としての苗族観の根底にあつたのは、非漢族を劣つた存在と見なす伝統的な華夷思想に他ならなかつたということになる。『苗』については南方の非漢族の代表格として位置付けられる程度の認識しなかつたのであり、先に見た「普遍史」的の民族史観の影響はもちろんのこと、前稿で見た近代の西欧東洋学に由来する明治日本の学説からの影響もまだ認められない。次節で見えるように、梁啓超の場合、日本の各種出版物から得た知識を媒介に、本格的に中国民族史の再構築が試みられるのは、来日から三年後のことである。前述の陳天華など、同時期の日本で民族運動に関わつた多くの中国知識人たちが、梁啓超にならつて漢族西來說や苗族先住説に立脚した民族史論を受け入れ、自らの政治的主張にそれを積極的に応用していくのは、さらにそれよりも後のことである。

(3) 苗族先住説の発見——梁啓超に見る先住民史観の受容

梁啓超が明治日本の東洋史学者らによる中国史論に接し、「中国史叙論」や「新史学」などに代表される、一連の中国史論を相次いで発表したのは、一九〇一年以後のことである。梁啓超によるそれらの中国史論は、いずれも伝統的歴史観を克服し、自らの政治主張に応用することを意図して執筆されたものであつた。現実の政治体制論において、

滿洲族の清朝による君主立憲政治を志向し、多民族国家としての存立を主張した梁啓超は、滿洲族を含めた多民族史観に立つて中国史を再構築したのである。その多民族史観の主柱が、漢族西來說であり、苗族先住説であつた。

今、中国史の範疇にある各人種について考えてみると、……第一は苗族で、中国の土族〔土着民族〕であり、今日のアメリカの紅人〔アメリカ先住民〕やオーストラリアの黒人〔アボリジニー〕のようなものである。その人種は有史以前において重要な地位を占めていたが、漢族が次第に發展するにつれ、苗族は日増しに北から南へと追いやられ、今では湖南・貴州・雲南・広西の間に余命を保っている。……第二は漢種で、すなわち私たち、現在では国内に遍く存在し、文明の血筋、黃帝の子孫と言ふところのものである。黃帝は昆侖の墟に起つてパミール高原から東に向かつて中国に入り、〔その子孫は〕黃河沿岸に暮らし、次第に四方へと繁殖し、数千年來にわたつて世に名声を得てきた。アジアの文明と言ふところのものは、いずれも我が種〔漢族〕の人が自ら種をまき自ら収獲したものである。第三はチベット種で、……第四は蒙古種で、……第五は匈奴種で、……第六はツングース族である。

キリスト教徒は全世界の人類がみな最初は一男一女から始まつたと主張するが、今日の世界に通用する人種学は、この説が根拠を持たず、論ずるに足らないことを明らかにしている。それならば各種族や各民族はそれぞれに發生したのであり、その数の多さは不思議でない。……ではわが漢族は果して一つの祖先から出自したのか、それとも個別に發生したのか、これはいまだ断定することのできない問題であるが、……黃河流域と揚子江流域ではその文明は個別に發達し、相互に繼承關係はないようである。……種族の境界はもとと定めることが難しいのだが、難しい中で強いてこれを定めるなら、白色・褐色・紅色・黒色人種に対しては、我ら〔漢族〕は明確

に黄色人種であり、苗・チベット・蒙古・匈奴・満洲の諸種に対しては、我らは当然に漢種なのである。四億の同胞〔漢族〕の誰もそれを否定しないはずだ（『中国史叙論』一九〇一年九月）⁽³³⁾。

亡命から三年後に日本で発表されたこの一文では、中国史に関係する民族の筆頭として記される苗族については苗族先住説が、それに次いで記される漢族については崑崙起源の漢族西来説が、それぞれ採用されている。その記述が、前稿で考察した市村・桑原などによる同時期の日本の歴史教科書の記述を基本的に踏襲するものであったことは、内容の比較によって容易に理解されよう。⁽³⁴⁾

梁啓超が、この当時、民族と歴史との関係をどのようにとらえていたかについては、以下の記述が参考になる。

歴史とは何か、人種の発達とその競争を述べることに他ならない。……歴史的人種と非歴史的人種とがある。同じく人種でありながら、どのようにして歴史的和非歴史的和を区分するのか。すなわち、自律的でありうる者が歴史的〔人種〕で、自律的でありえない者が非歴史的〔人種〕である。なぜか。自律的な者は人を排除し、自律的でない者は人に排除されるのである。人を排除する立場の者は、自らの人種を拡張して他の人種を侵食することができ、ひたすら世界史の舞台を独占していくのである。人に排除される立場の者は、自らの人種が日ごとに虐げられて衰微し、外に向かつて拡張しえないのみならず、内においても滅び去り、ついにはそれが歴史的に本来持っていた地位を失い、舞台は他人に占領されてしまうのである。それゆえ、数千年来にわたる各種族の盛衰興亡の足跡を述べるのが、歴史の本質であり、数千年来にわたる各種族の盛衰興亡の理由を述べるのが、歴史の精神なのである（『歴史与人種之關係』一九〇二年八月）⁽³⁵⁾。

これによれば、中国史においては、漢族が自律的な「歴史的人種」で、苗族は他律的な「非歴史的人種」というこ

とになる。梁啓超にとっては、それらの盛衰興亡の足跡を述べるのが中国史の本質と考えられていたと理解されるのである。

清朝国家の帰趨をめぐり、漢族と満洲族との関係が最大の焦点となった清末の中国において、苗族はそれらの二民族と同時代に共存していた民族の一つでもあった。過去の歴史に対する認識とは別に、この苗族を梁啓超は現実の政治体制論の中でどのように位置付けようとしていたのだろうか。

ブルンチュリ氏は歴史的な事実によつて、民族と国家との関係を以下のように述べる。……多数の民族を合わせて一つの国家を形作るのは、弊害が多いが利もまた少なくない。……しかしこれらの多民族を混合した国家では、必ずや一つの強力な民族を中核とし、「それ以外の」諸民族を統括すべきであり、それによつて国家の基礎は堅固となる、と。……この二年、民族主義がわが国に入つて、「章炳麟らの主張に見るように」「排満」の念が盛んになり復活しようとしている。しかし今、私は「ブルンチュリ氏の説を踏まえ」ここに三つの問題を考える。……必ず満洲民族を隔離してはじめて建国できるのか、それとも満洲民族ないし蒙古・苗・回・チベットの諸民族を融合しても建国できるのか、と。これが私が疑問を抱かざるを得ない第三の問題である。

これ「ブルンチュリ氏の説」に基づいて言うならば、わが中国が言う民族とは、小民族主義における以外に、さらに大民族主義を提唱すべきである。小民族主義とは何か。漢族の国内他民族に対する民族主義のことである。大民族主義とは何か。国内の内地・藩属部の諸民族を合わせて国外の諸民族に対する民族主義のことである。……これより後、世界に対して「中国は」、形勢よりして帝国の政略を取らざるをえないのであり、漢族・満洲族・蒙古族・回族・苗族・チベット族を合わせて一大民族とする……ことが果してあれば、その大民族では必ずや漢人

が中核となるはずである（「政治学大家伯倫知理之学説」一九〇三年五月）⁽³⁶⁾。

これにより、明治日本の歴史学の論著を通じて苗族先住説に接し、多民族史として中国史を構想していた梁啓超が、当時、現実の政治体制論としては、漢族を中心に満洲族・蒙古族・回族・苗族・チベット族を包摂する、六大民族からなる多民族国家を構想していたことが明らかとなる。周知の通り、辛亥革命後の中華民国では苗族が抜け落ちて「五族共和」が政治的スローガンとなるのだが、上で見たようにこの時期、苗族先住説からの影響を強く受けていた梁啓超にとって、苗族は国家を構成する主要民族の一つとして欠くべからざる存在と見なされていたのである。

(4) 近代啓蒙思想としての苗族先住説——衰亡の歴史と「同化」の論理

二十世紀初めの中国知識人たちによる民族主義的議論の中には、上で挙げた陳天華の主張に見るように、反帝国主義としての色彩が強く認められるものが少なくなかった。その背景には、ロシアの「満洲」への権益拡大に反対する「拒俄運動」の展開があった。ところが運動の矛先がそれを弾圧し外交的にも無策な清朝中枢に向けられるようになる、知識人たちの主張は反満洲の民族主義としての色彩を強めた。そしてそれは、前節で見た梁啓超の多民族国家構想とは正反対に、満洲族を排除して漢族による国家の再興を目指す、大漢族主義に立った「排満」革命を志向する議論へと発展していったのである。⁽³⁷⁾

「種族革命」として規定された彼らの革命運動において、「排満」を宣伝する手段として、世人の歴史観念の刷新を打ち出したのは章炳麟であり、一九〇二年のことであったという。⁽³⁸⁾ 次節で述べるように、中国知識人の中でこうした「排満」革命思想が高揚し始めたのは、一九〇三年のことである。先に見た、ブルンチュリ説を援用した梁啓超の六族

国家論は、この時期の「排滿」論の高まりを意識したものであったのである。

そしてまた、これと同時期に新たな苗族史論も現れた。旧来型の「劣種」としての苗族観と、近代東洋学の学説である苗族先住説とが合流し、苗族を啓蒙思想としての社会進化論に基づく「優勝劣敗」の論理の中に再定位する議論が現れたのである。そのきっかけを用意したのは、梁啓超とともに彼らの言論の場としての『新民叢報』を一九〇二年に創刊した蒋智由である。一九〇三年五月十日に彼が同誌に発表した「中国史上旧民族之史影」という論文は、近代中国知識人によって執筆された苗族史に関する最初の専論である。その中で、蒋智由はまず以下のように、苗族先住説に立って苗族研究の意義を総括する。

わが種族「漢族」の前に中国の主人公だったのは誰か。それは苗族である。苗族は、初め中国内地に暮らしていたが、後に「漢族に」敗れ退いて凋落し、南中国の辺境に棲息するようになったのである。苗族が東洋・南洋の各種族と種類の関係を持つのか否か、わが種族「漢族」と血縁上の混血があるのか否か、これは人類学上の一つの問題である。要するに、「わが国の」いにしえの民族を研究しようとする者は、まずは必ず苗族の由来と分散移動を研究しなければならない。これによって東洋の人類学に発見があるかもしれないが、いまだ明らかでないのである。今日、苗族を論ずる者の中に、シャム（タイ）国のタイ人及び台湾北部の生番のいわゆる黠面番と多く類似すると言う者もいるが、その説は果たして証明するに足るだろうか。彼の苗族は、もとより南中国に棲息する。その一部が、あるいはシャム（タイ）国および台湾に入り、別に一つの種族を形成したかもしれないが、いまだ明らかでない。

蒋智由は同論文の中で、次いで烏居龍藏の成果を以下のように概括する。

近ごろ、日本人の鳥居龍藏氏は、揚子江西南の蛮族の調査を行なった。調査地域は、湖南の一部分と、貴州の全体と、雲南の東部、四川の西南部である。……調査事項は、(一) 體質上の調査……、(二) 言語上の調査……、(三) 土俗上の調査……、(四) 考古歴史上の調査……、(五) 写真撮影である。この調査は、単に揚子江西南の蛮族について明らかにしただけではない。その結果は、あるいはベトナム・ビルマ・シャム・台湾・フィリピン・マレー諸島の民族の「由来を明らかにする」ために必要となるものである。

その内容が、一九〇三年三月に八ヶ月に及ぶ西南中国での調査を終えて帰国し、同年五月五日付けの『官報』に掲載された、鳥居龍藏の出張報告「人類学上取調報告」の要約であることは明らかである。蒋智由が、これほど早くそれを引用してこの論文を書き上げていることから、鳥居の情報に彼に与えた衝撃の大きさをうかがい知ることができる。蒋智由はこれに続けて以下のように記述する。

苗族は今日においては衰退し凋落しているが、往古においては広い地域に種族として分布しており、その勢力は、あるいは今日の数百倍だったであろう。ではその文化の有無、文化の程度はどうだったのかということとは、歴史における一つの疑問である。日本の田能村梅士氏は、上古の苗族がまた文明を持っており、かつその文明の生成が華人〔漢族〕よりも早いと論じている。ここにその内容を記す。わが中国の学界もこれを知るべきである。ここで言う田能村梅士については、すでに前稿でその著作『世界最古の刑法』（一九〇四年二月刊）の内容を詳細に検討した。蒋智由は以下、田能村の学説を長文にわたって引用する。

支那の文明の発祥はどこであったのか。今の学者たちは疑問を持つことなく、支那の文明は黄河の流域に発祥したと言う。しかしながら、私はあえてその説に同意せず、支那文明は果してどこから発祥したのかという疑問

を提出したのである。

支那の文明が黄河に発祥したと言うのは、事実としては確かに誤りではない。しかしただ支那の北部について言うにすぎない。もし支那の全域を論ずるなら、南方の文明は実は別に揚子江に発祥したのであり、またその文明の発生は北方よりも早いのである。（②）

三苗の文明の発生に、実のところ北方よりも早いものがあることは、証明する材料に乏しくない。他でもない、一部の『尚書』がそれである。……このために私は支那の文明は、南方が北方よりも早く、南方〔の文明〕が実のところ揚子江に発祥すると断定したのである。（③）

おそらく三苗は支那固有の人種の一つであつて、三皇五帝の民族〔漢族〕は外国の人種で、支那の西北から侵入し、北方の黄河附近に展開し、土着の人種との衝突を繰り返していったのである。以前、黄帝がアッシリアの人であるという学説があつたが、おそらくこれに近い発言だろう。三苗という人種は、その初めはあるいは揚子江の南に限られていたが、次第に中央部に入り、黄河附近に至つたところで北人〔漢族〕に敗れて萎縮し、再び揚子江以南に戻つたのだろう。（①）

それならば南方文明がその後、表にあらわれないのはなぜか。北人によつて征服され、以後萎縮してしまつたからである。黄帝は、戦争に長けて天子となり、炎帝と戦つて勝ち、蚩尤と戦つて勝ち、ついには戦勝の余勢で四方を平定し、……当時の三苗の首府は洞庭・彭蠡の間にあり、今の長沙から遠くなかつたが、黄帝は南伐して揚子江を渡り、……当時、南方の各地域は、ほとんどすべて北方の黄帝によつて征服されたのである。（④）

以上抜粋した部分の内容を、前稿で紹介した田能村梅士『世界最古の刑法』の記述〔①〕〔④〕と比較すると、〔①〕

〔②〕のように大意として共通するもの以外に、〔③〕〔④〕のように細部まで一致するものも見られる。蔣智由が自ら記している通り、鳥居龍藏と並び、田能村の学説を参照したことは、疑う余地がない。⁽⁶¹⁾

蔣智由は以下のように続ける。

田能村梅士の述べるところは、以上の通りである。私はこれを読んで感ずるところがあつた。古来、種族の盛衰は戦争に関係するところが最も大きい。黄帝と蚩尤（九黎は苗族で蚩尤は苗族の君長）の戦いで、わが種族（漢族）は勝利してその子孫は大陸に広く分布し、代々中国の大地をたもってきたが、かの苗民はひとたび敗れ去るや、江淮や荊州および北方で占有していた地域をことごとく失ひ、〔蚩尤が〕三危に流されるに至つて、〔江南の〕彭蠡・洞庭の間の根拠地もあわせて失ひ、山谷の間に追いやられ、今ではまったく振わなくなつてしまつてゐる。……蚩尤のほかには以後一人もその中にあつて奮起する人物はなく、ひとたび敗れた後はまた同族を束ねて奮起勉強したとも聞かず、氣力をふさいで衰亡した。劣等の人種は、もとより競争の場に参入しえないのである。今日欧州人が〔中国に〕乱入してきても、わが種〔漢族〕はうなだれ耳をふさぐばかりで、その言いなりになり、〔自ら〕計をなすことができない。苗族を哀れむ暇はない。わが種族を哀れむべきだ。……ああ、滅んだ種族の状況はもとよりこのようである。なんと悲惨なことか。今日、欧州人の私たちへの仕打ちは〔それ以上に〕ひどいものだ。わが同胞よ、痛みを感じて目覚めよ。

これによつて明らかなように、本論文の目的は、単に苗族史研究の意義を主張することにあつたのではなく、これに先立つ梁啓超らの論著と同じく、「劣種」としての苗族を通じて、国人の危機意識を煽るという点にあつた。

しかしその際に、伝統的地理認識の枠組みをこえたアジア的視野で苗族研究の意義をとらえ、また長江を黄河と対

置きさせることによって儒学經典とそれに立脚した伝統的歴史観を相対化し、さらに苗族が「劣種」となった経緯を先住民民族としての歴史的背景によって説明しようとする姿勢は、上で見た梁啓超らによる、華夷思想の影響を色濃く残した苗族論と大きく異なる点である。

この引用文が示すように、蒋智由によるこうした問題意識が、鳥居・田能村など、明治日本の最新の研究成果に刺激されたものであったことは明らかである。そして『官報』記事への素早い対応に見るように、その直接の契機は鳥居龍蔵の調査成果によるものだったと考えられる。蒋智由は、鳥居の調査成果を通じて、初めて同時代を生きる苗族の現実を知ったのである。

中国知識人たちは、この蒋智由の論文を通じて、苗族への知的好奇心を持つに至った。本論文に続いて、梁啓超と蒋智由が主宰する『新民叢報』に苗族の現状を報告する記事が二篇掲載されていることは、その現れである。⁶²

その一篇である「中国原始民族之現状」（一九〇五年一月）には、梁啓超も以下のような序文を寄せており、彼がまた苗族の過去と現況に深い関心を抱くようになっていたことがうかがわれる。

近ごろ、国史を著す中で、上古の漢族と苗族の激しい抗争について記した断片的な記述を見て、深く悲しんだ。
〔生存競争に敗れた〕劣敗の種族は、その歴史の片鱗が後世に伝わらず、さらにまたその性質や習俗についても世に知られることがない。哀れで惜しまれる。

梁啓超はその直後に発表した別の論文の中で、鳥居龍蔵の苗族に関する論著を自ら援用することによって、中国民族史を以下のように体系付けている。

世界の耽々たる列強は、今まさにわが中国をまな板の上に置き、汲々と分割して食らおうとするのに日々暇が

ないが、私たちの間にはいわゆる省界問題〔出身省ごとの差別意識〕が日ましに蔓延し、……近ごろでは在日の留學生の間でも広まっている。知識が開化し、関係が複雑になればなるほど、この現象はますます顕著となる。

……私は今、国史に携わっており、……それでその研究の成果を発表し、この論文を著す。……私がこの論文で、わが民族の共同の感情を喚起しようとするのか、わが民族の対立感情を増長させようとするのか、私はあえて言わない。材料として選び取るのは読者である。

わが中国の主族、すなわちいわゆる炎帝黄帝の子孫〔古代漢族〕は、果して中国の原始の〔土着の〕住民であったのか、それとも他から移住殖民して来たのか。もし移住して来たのなら、その最初の祖国はどこにあったのか。このことは今も定論がない。私は〔古代漢族が〕西から来たとする説に傾いており、これを仮説の前提として本論の考証を進めることとし、もうこれには言及しない。……今の中華民族、すなわち通常俗称するところの〔今の〕漢族は、当初からひとつの民族であったのか、それとも多数の民族の混合によって成り立っていたのか、これが私の研究したい第一の問題である。……私は第一の問題を解釈し、あえて以下のように断定したい。すなわち、今の中華民族〔現在の漢族〕は、当初からひとつの民族ではなく、実は多数の民族の混合によって成り立っていた、と。

思うに、先秦以前に中国本部に分かれて居住していた諸族は、炎黄の一派の華族〔古代漢族〕以外に、計八族あり、以下それを分けて論じたい。(一) 苗蛮族…苗族はわが族〔古代漢族〕と交渉が最も古く、黄帝から堯・舜の時代まで激烈な対立があった。……今の貴州附近の苗は、Mun と自称し〔日本人の鳥居龍蔵の説に基づく。鳥居氏はかつて苗疆を探検すること二年あまりであり、帰国して著書が非常に多い〕、……わが古代においてはこれ

を苗 Miao と称し、『山海経』でも三苗、三毛蛮と称している。……盛時においては、絶世の偉人である蚩尤を酋長として、長江を渡り黄河を越えて、わが炎帝と戦った。……この族が数千年来にわたって退化して移住した足跡は明らかであり、長江の北から江南へ、洞庭湖の東から西へ、ついには沅水を遡り、その上流の貧しく瘦せた土地に達し、その衰亡の様は今日において極限に至っている。……（二）蜀族……、（三）巴氏族……、（四）徐淮族……、（五）呉越族……、（六）閩族……、（七）百粵族……、（八）百濮族……。以上が私の推測するわが国の各地の原始時代の諸民族についての概要である。

列挙した八族は、いずれも中国の民族を構成する最も重要な構成要素である。それらの種族が太古において、あるものは土着で、あるものは外から移住してきたのかについては、今明らかでないが、要するに、有史より以来、中国に居住していたのであり、その中で苗・濮の二族のほかは、いずれもすでに中華民族（現在の漢族）に同化し、もはや異なる痕跡を見つけ出すことはできない。これらの諸族を除外しては、華族（古代漢族）もありえないと言つてよい（梁啓超「歴史上中国民族之觀察」一九〇五年三月〜四月）⁽⁶³⁾。

以上の議論で苗族について参照されている鳥居龍蔵の研究成果は、「呉越」「閩」「百濮」の諸族についての議論の中でも繰り返し引用されており、それが梁啓超の民族形成論に与えた影響の大きさをうかがい知ることができる。ここで彼が議論の主題としているのは、古代における「中国本部」の諸族で、おもに華中・華南の南方民族である。梁啓超は、従来漠然と理解していたに過ぎなかった南方民族の多様な実態を、鳥居らの研究成果を通じて再認識し、歴史的関心からそれを自らの学説の体系化に応用したのである。異なる来歴と系譜の諸族が歴史的に同化融合して今の漢族を形成するという点に議論の重点があり、その流れから取り残された西南中国の「苗・濮」（今日の苗族・彝族）が

非漢族として余命を保つという見取り図が描かれている。

このように、鳥居龍藏の調査成果から刺激を受けて相次いで発表された蔣智由と梁啓超の論文で、共通して示されているのは、太古の中國大陸に、黄河流域、あるいは炎黄系統の「華族」だけではない、多種族が存在し、歴史を織り成したという考え方である。しかしどちらの議論も、複数の民族が歴史的に対等に存立し続けたと主張したのではない。梁啓超が今日の漢族を「中華民族」としたように、あくまでも漢族への同化融合が歴史の本流と見なされ、また外来民族の圧迫による先住民の衰退という発想法に基づいて、今日の苗族はいにしえの有力民族の残余と位置付けられたのである。

二人はともに、「優勝劣敗」の論理から見た「劣種」の歴史過程を通じて、本来、歴史的民族として輝かしい歴史を持っていたはずの自分たちが、列強による圧迫の中で存亡の危機を迎えているという状況を憂えた。そして、それを苗族先住説によって過去の歴史に重ね、国人の危機意識を煽ったのである。

(5)「排満」主義者の民族史観——「排除」の論理

梁啓超が一九〇五年三月に、こうした民族史観をあえて提示したのは、前引の冒頭部分に見られるように、在日の中国知識人内部での対立意識の高まりに危機感を抱いたからであった。その対立が何を指したのかについて、梁啓超は何も記していない。しかしこの論文が、満洲や蒙古などの塞外の諸族を初めから議論の枠外に置き、「中国本部」の諸族の「共同的感情」を鼓舞することを目指している点からは、漢族内部での派閥意識を焦点としていたと推測されよう。

当時、広東人である梁啓超を日本で取り巻く環境として、自らの主張する清朝による君主立憲思想と、当時、江蘇・浙江・湖南人の留学生を中心に高まっていた、清朝打倒を目指す「排滿」革命思想との対立構造があった。この論文も、それを念頭に置いて書かれたと見るべきであろう。

中国知識人の中でのこうした「排滿」革命思想の高まりは、一九〇三年の半ばから急速に進んだ。中国本土での变法運動以来、立憲君主制に基づく近代国家を、滿洲族を包括しながら建設することを求め続けてきた梁啓超らは、このような展開に直面し、危機感を抱き始める。上述のように、彼らがもとは「優勝劣敗」の論理に立つて、危機意識を煽るために発信してきた各種の民族史論が、以下に述べるように、「排滿」革命のための主張に利用され、やがてその批判の矛先が彼ら君主立憲派へと向けられるに至ったからである。

すでに述べたように、二十世紀初めのロシアによる「滿洲」への権益拡大は、それに反対する「拒俄運動」の高まりを引き起こし、やがて運動の矛先が、それを弾圧し外交的にも無策な清朝中枢に向けられると、知識人たちの主張は反滿洲民族主義としての色彩を強めるようになった。

「種族革命」として規定された彼らの運動において、「排滿」を宣伝する手段として、世人の歴史観念の刷新を打ち出したのは章炳麟であり、一九〇二年三月に東京で開かれた「支那亡国二百四十二年紀念会」に際してのことであった。⁽⁶⁵⁾ 君主立憲派の主張に対する章炳麟の反論は、一九〇一年八月の「正仇滿論」に遡り、一九〇三年五月の「駁康有為論革命書」を境に勢いを増す。「駁康有為論革命書」は、一八九八年の戊戌変法で君主立憲を目指し挫折した後、梁啓超と同じく海外に亡命を余儀なくされていた康有為が、一九〇二年に発表した「答南北美洲諸華商論中国只可行立憲不可行革命書」に対する、章炳麟の激しい反駁であった。⁽⁶⁶⁾ 匈奴や劉邦などの故事を引いて、種族の区分を歴史的な観点

から相対化し、漢族と満洲族との区分を否定して、清朝による立憲君主制の導入を主張する康有為に対し、章炳麟は、楚人である劉邦と満洲族を同列に扱う康有為の歴史的議論の粗さなどを批判して、満漢の別の意義を改めて強調し、清朝を打倒する種族革命の必然性を訴えたのである。

章炳麟のこの反駁がなされた一九〇三年は、近代における中国民族論の展開において、画期となる出来事が相次いだ年であった。鳥居龍藏による苗族調査の概要が発表（五月）され、それに触発された蒋智由の論文（五月）が、苗族とその歴史に対する中国知識人の関心を新たに引き起こしたことは、すでに前節で述べた通りである。これに加えて、大阪で開催された第五回内国勸業博覧会に際して附設された「学術人類館」では、アイヌ民族や台湾先住民族などの諸民族と同列で、「支那人」が展示されることに憤慨し、中国人留学生が抗議行動が起こし、清国公使から撤去申し入れがなされた（二月）⁽⁸⁶⁾。上述の章炳麟による康有為に対する反駁がなされたのもこの年である（五月）。そしてまた、章炳麟の序文を附し、以下の内容を持つ、鄒容『革命軍』が上海で発表されたのである（五月）。

わが黄種、わが黄種の中国の皇漢人種が、東洋歴史上、団結する人種、排斥する人種について、わが同胞のために述べ、同胞がこれを見て感ずるところがあるようにしよう。アジアの黄色人種は、中国人種・シベリア人種の二種に大別される。中国人種は中国本部・チベット・インドシナの一帯にひろがり、さらに三族に細分される。第一、漢族。漢族は東洋史上もっとも特色ある人種であり、これこそわが同胞である。中国本部に拠り、黄河の沿岸に住み、次第に四方に繁殖した。古来東アジア文化の指導者の地位に立ったのは、実にわが皇漢民族だ。……第二、チベット族。……第三、コーチシナ族。シナの西南部から、安南・シヤムなどの国にひろがる。この族は古代に中国の本部を占拠していたようだが、漢族に漸次駆逐された。周以前の苗民……はおそらくこの族に属す

る。シベリア人種は、東方アジアの北部から北方アジア一帯に繁殖している。今、さらに四族（三族？）に細分される。第四、モンゴル族……、第五、ツングース族……、第六、トルコ族……。ここから見ると、わが皇漢民族は、黄河東北一帯の地からおこり、幾星霜を経て四方にひろがり、……わが漢民族は種族を拡張する力をこのように豊富に持っているのだ。……ああ、わが漢族は、祖国を飛躍させる漢族ではないか。アジア大陸上に独立する漢族ではないか。偉大なる国民たる漢族ではないか。……今日の十八行省は、わが皇漢民族の嫡系の同胞が、出生し、成長し、国族を集めた土地ではないか（鄒容「革命軍」陰曆一九〇三年三月）⁽⁶⁷⁾。

ここでの議論の究極の目的が漢族の自尊心を鼓舞することであり、諸民族に関する整理についても、漢族を中心とする「中国人種」が、満洲族を含む「シベリア人種」とは文字通り異なる「人種」であって、それに占拠された現状を「排満」革命によって終局させようとする強い意志を持つものであったことは明白である。そこでは苗族が「中国人種」の一つとしての「コーチシナ族」の一種として位置付けられているが、その他の分類や述べられている内容を含め、いずれも前稿で紹介した桑原隲藏『中等東洋史』の引き写しと言つてよい。漢族が「黄河東北」起源とされるのは、「黄河西北」の誤植でなければ、黄帝が炎帝・蚩尤と戦ったとされる阪泉・涿鹿の地を念頭に置いたものである。いずれにしても漢族について西來說的議論が乏しく、その主人公的地位が強調されるばかりであるのは、苗族については桑原の記述をそのまま採用して苗族先住説を継承している点と対照的である。

鄒容による以上の主張は、「排満」主義に立つ民族史論の模範となり、以後、革命派の知識人に類似する議論が多く見られるようになった。ただし、その際には漢族西來說が、かえって漢族の優秀性を主張し「排満」を正当化する論理として高く評価され、それにそつた議論を展開するのが主流となった⁽⁶⁸⁾。苗族先住説は、そうした主張の民族的

提として位置付けられ、革命派の知識人による民族史論のもう一つの理論的主柱となったのである。

その一例として、陳天華が前掲の「敬告湖南人」から数ヶ月後、一九〇三年の秋に執筆した「警世鐘」には、かつては見られなかった以下のような民族史論的記述を確認できる。

〔世界の〕五大陸に住む人にも五種ある。……黄種についてののみ論じれば、〔第一に〕漢種（始祖である黄帝が四千三百余年前、中国の西北から来て、蚩尤にうち勝つて、従来中国にいた老族〔古い種族〕である苗族を追いはらい、黄河の兩岸に国家を建てた。現在の中国内部の十八省の四億人は、いずれも黄帝様の子孫であり、漢種と称する）、第二に苗種（従来中国にはこの種の人々が遍く分布していたが、今では雲南・貴州・広東・広西に若干住むだけになっている）、第三は東胡（ツングース）種……、第四は蒙古種に分かれ、それら以外の種族は細かく論ずるまでもない（陳天華「警世鐘」一九〇三年秋）⁶⁹。

また章炳麟は、ラクペリーのバビロニア（『旧約聖書』のカルディア）起源説にしたがって、以下のように述べる。

〔漢族の〕宗国カルディアは、古文獻に見える葛天のことだろう。小アジアの南に位置する。……サルゴンが神農である。……後にサルゴンにはナクフンテーが生まれるが、それが黄帝であり、……東にやって来て、昆侖を越えた。……昆侖はパミール高原のことである。……黄帝は中国に入ると、土着の君主であつた蚩尤と阪泉で戦い、その一族を平らげた。……その末裔は今日も存在し、……俚・繇〔今日のヤオ族〕の諸族は、湖北と広東に分かれて今日に至る（章炳麟「序種姓」一九〇四年六月）⁷⁰。

このように、漢族西來說と苗族先住説をセットとする民族史論は、当時の革命派の中国知識人の間で、一大ブームを巻き起こしたのである。⁷¹

(6) 苗族先住説をめぐる論争

こうした革命派の動きと、君主立憲派の知識人も無関係ではなかった。例えば、蒋智由は、一九〇三年八月から一九〇五年一月にかけて『新民叢報』に「中国人種攷」を連載し、西洋の人類史論を紹介し、漢族西來說に論評を加え、論断は避けつつもバビロニア起源説に傾く姿勢を見せている。本論文は、先に見た苗族史論と同じく、同時代の中国知識人たちに広く読まれ、政治的立場を越えて革命派の知識人にも影響を与えたと見られるのである。⁽²³⁾

革命派の知識人による「排満」論が急速な高まりを見せたこの時期、中国国内では光緒新政の始動で、清朝への立憲君主制の導入が現実味を帯び始めていた。そうした中で、蒋智由は、梁啓超とともに多民族の共同による立憲君主国家の建設を目指すとする陣営にあつて、「排満」論の高まりを抑えることに躍起になっていた。

変法後の中国は、国家の安定が不可欠である。……人民の幸福を向上させることが第一で、民族の異同による感情は二の次である。……それならば今日のために採るべき政策は何か。それは立憲主義の下、漢族・滿洲族・蒙古族の諸民族がともに政治的権利を持つて、東洋の一大民族国家を建国し、それによつて世界の列強の中において競合存立を図るということである（蒋智由「変法後中国立国之大政策論」一九〇七年十月）⁽²⁴⁾。

この観点に立ち、蒋智由は独自の多民族史論も提出している。そこではすでに、先の苗族史論文に色濃く見られた、単純な「優勝劣敗」式の主張は影を潜めていた。

戎狄は古代に中国に原住した民族であり、漢種は夷狄の一種から進化したものではなからうか。先ごろ飲冰室主人（梁啓超）は「歴史上中国民族之觀察」を著し、……その意義は私が述べるまでもないが、私はこれに関心を持ち、また飲冰室主人とはやや異なる一種の見解を持つ。……私は、戎狄が外来の種族ではなく、原始に中国

に居住した古い民族であると考える。……また私は、漢族は夷狄の一種が進化したものではないかと考える。……
そもそも漢族の原始の来歴は明らかでないが、……歴史を読む者は二つの説を立てずにはいられない。一つは、
黄帝は漢種であり、黄帝以前の中国のいにしへの帝王はみな夷狄の人種であるということ、また一つは、太皞・
女媧・神農・黄帝は同一種族であり、その子孫はみな漢族で、その先祖はみな夷狄種から出自することである。
……それならば漢種は原始に夷狄と一つの種族からともに出自したということは、すでに明らかな証拠がある
ことになる。……文化的隔たりが長く積み重なって、遂に種族的な隔たりとなり、このために戎狄の名は
また一つの種族的な区別の意味をあわせ持つことになったのであろう。……漢族と戎狄は理論的に言うと二つの
種族と認識すべきで、漢種は古代中国に居住した種族の中で進化したもの、戎狄は古代中国に居住した種族の中
で進化したものである。しかし、これを古代の住民の中に遡るのならば、私は漢種が戎狄と実際には同一
種で、ただその後の進化と不進化の区別があるに過ぎないと考える。……私はゆえにここに二つの命題を掲げる。
一つに戎狄は原始に中国に居住した種族である。一つに漢族はその原始において戎狄と同種で、おそらく戎狄か
ら進化したものであろう。……(かつて私は「中国人種攷」を著し、「漢族」西来説を主張したが、近頃はこの説
にすこぶる疑問を持っている。……ゆえに私の中国人種に関する見解は、すでに以前とは異なっているのである)
(蔣智由「読歷史上中国民族之觀察系論」一九〇六年一月)⁽⁷⁵⁾

以上から明らかなように、本論文は、梁啓超による「歷史上中国民族之觀察」(一九〇五年三月)を批判的に継承し
たものであった。そしてまた、外来の民族移動説を理論の主軸としていた旧説に決別し、本土での自律発展を軸とし
て多民族からなる民族史の展開を説明しているのである。⁽⁷⁶⁾

北方民族が漢族と同族であることを歴史的観点から主張する議論は、上で見た康有為による一九〇二年の「答南北美洲諸華商論中国只可行立憲不可行革命書」と同じ指向性を持つものと言える。しかし康有為のそれが、より古い雍正帝の『大義覺迷錄』と同じく、文化的同化という論点によって、華夷の区別が無意味であることを主張したのに対し、蔣智由はここで進化論的視点から同族（同祖）であるとする議論を展開しており、両者の間には決定的な相違がある。ただ本文中で議論の主題となっている戎狄とは、すなわち北方民族のことに他ならないから、これが康有為の場合と同じく、同時代の滿蒙両族を念頭に置いて発信された議論であったことは疑いのない点である。

本稿前段で述べたように、梁啓超は、現実の国家体制としては多民族による立憲君主国家の建設を目指しており、滿漢の垣根を取り払い、多民族史として中国史を描き出すことに早くから尽力してきた。ところが「歴史上中国民族之觀察」の記述に垣間見るように、彼にはなおも、中国本土の諸族の同化融合の過程を主軸に中国史をとらえ、現今の漢族を「中華民族」、現今の苗族を同化の過程からもれた残余と見なし、さらに塞外の滿洲族などを外族とする意識があった。蔣智由はこれに修正を加え、今日風に言えば多系進化とエスニシテイの観点に立った、より高い次元の中華民族論としてそれを発展させ、君主立憲派の新たな民族史論として提出したのである。これが、同時期に急速に進んだ、革命派による「排滿」主義的民族史論の展開と無関係でなかったことは想像に難くない。

すでに上で見たように、梁啓超が漢族内部での党派対立に危機感を抱き、漢族＝中華民族の一体感を扇動したのは、一九〇五年三月のことであったが、以後の歴史は梁啓超の意図とは異なる展開を見せた。従来、出身省をおもな区別として組織されていた革命派の諸団体が、同年八月、大同団結して中国同盟会が東京で結成されたのである。同盟会は機関紙として『民報』を刊行し、以後、革命派と君主立憲派との間に、各機関誌上における激しい論争が始まった。

梁啓超「歴史上中国民族之觀察」(一九〇五年三月)と蔣智由「讀歴史上中国民族之觀察系論」(一九〇六年一月)とに見られる方向性の相違は、その間に起きた彼らを取り巻く状況の変化を反映していると見るべきであろう。

民族史論をめぐる両党派の対立が、満洲族の位置付けを最大の争点としていたのは言うまでもない点である。革命派知識人の「排満」論に対し、梁啓超もまた自ら以下のような反駁を加えている。

今の皇室〔清朝〕はもともと建州衛の地に興った。建州衛は明代以来我が国の羈縻州であり、その酋長が〔明の〕策命を受けてその部族を統治していたのは、雲南・四川・広西の土司のようなものである。そうであれば、今の西南土司の〔統治する〕人民〔苗族など〕を中国の人民と認めざるをえないのなら、明の時の建州衛の人民もまた中国の人民と認めざるをえず、愛新覚羅氏〔清朝皇室〕もまた我が固有の人民の一分子に他ならないのである(梁啓超「雑答某報」(Ⅱ『民報』)一九〇六年八月)。

ここに認められるのは、北と南の民族史を同列に比較し、西南民族によって満洲族の処遇に関わる問題を相対化しようとする意図である。梁啓超は、ここでまた苗族を自説に援用したのである。こうした主張に対し、革命派の「排満」論者は、北と南の民族を歴史的に同列に比較するという梁啓超の論法や、梁啓超が援用した政治学説の理解の浅さを批判し、以後、相互の批判の応酬が繰り返されていくことになった。

こうした果てしない論争に割って入ったのは、第三の陣営であつた。両派の間の論争に対して、以下のような問いかけがなされたのである。

近ごろ中国の出版する雑誌は数種にとどまらないが、大抵は二つの陣営に分かれる。一つは満洲・漢・蒙古・回・チベット族の平等と君主立憲を主張するもの、……もう一つは満洲族の駆逐と漢人によって民主国家を組織

することを主張するものである。……しかし「無政府主義者の」私から見ればどちらの陣営も誤っている。……中国が無政府であつてはならない、滿人は異民族だから、漢人が滿人にとつて代わるべきだとも言うのであれば、この説はとりわけ誤りである。漢人から滿人を見れば滿人が異民族だが、苗民から漢人を見れば漢人もまた異民族である。民族主義を実行するのであれば、かの滿人にあつては無論駆逐されなければならないが、我らが漢人もまたバミール高原の西に引き返し、中国を苗民に返さなければならないのであつて、どうして中国の統治権が漢人の独占でなければならないと言えようか。これゆゑ民族主義が公理に適合しないこと、その度合いが最も甚だしいものであることがわかる（志達「保滿与排滿」一九〇七年七月）⁽⁸⁾。

掲載誌から見ても、この論者は無政府主義を標榜する中国知識人であつたと考えられる。漢族西來說によれば漢族は外来民族にすぎず、苗族先住説に立てば中国はもともと苗族の土地であるのに、革命派が漢族に権力を取り戻すことを主張しているのはおかしいとして、彼らは民族主義が抱える根本的な矛盾をついたのである。問題の鍵が、苗族先住説を前提とした漢族西來說にあるのは明らかであつた。同様な批判は相次いだ。

いま民族主義を主張する者が目的としているのは、漢人だけが政權を握ることができ、全国の行政機関はすべてそれが掌握し、その他の滿洲族・蒙古族・回族・チベット族の諸族はいずれもうなだれて耳をふさぎ、漢人が定めた法律の下に服従するということである。だからいま民族主義を主張する者はすなわち排滿なのである。……ならば試みに問うてみよう。この四億人の土地はいったい誰のものか。漢人の祖は、いま民族主義を主張している人々によれば、軒轅（黄帝）と推測される。ではその軒轅について論ずるなら、彼はアジアの西北からやってきたのであり、「その当時中国大陆の」南方の大部分はすべて苗の疆域だったのである。もし民族主義を言うのな

ら、自分がまず排斥される対象となるのである（褚民誼「伸論民族・民権・社会三主義之異同、再答来書論『新世紀』発刊之趣意」一九〇七年七月）⁷⁹。

こうした相次ぐ批判に対して、『民報』を主宰し、革命派の言論を主導する立場にいた章炳麟は、自らがかつて主張していた漢族のバビロニア起源説を否定し、漢族西來說と苗族先住説を基本とした従来の自説の枠組みそのものの見直しを図り、ただちに反駁を開始した。

種族革命の本旨は復仇である。復仇は上古野蛮の事であるとするものが多いが、復仇の是非かを、道理にもとづいて論定したい。……こういう意見がある。中国は漢族が開拓したところなのに東胡（満洲族）が寧古塔（清室の故地）から来て漢族固有の地を盗んだから、漢族がこれを排斥しようとするのだ、というけれど、実は、漢族が来る前、この中国は苗族が開拓したものであるとは考えないのか。諸夏の種族がパミール高原からやって来て苗族固有の地を盗んだのだ。苗族としてこれを排斥したいはずである。漢族の排満が正義であるなら、苗族の排漢もまた正義ではないか、というのである。答えはこうである。満洲族が寧古塔から来たことは歴史に明らかであるが、漢族がパミール高原から来たとは、『家書』『穆天子伝』の神話から示唆を得て類比推論を重ねた結果なので、歴史上にその明証があるものではない。苗人の種族が当時中国に遍在していたのか、蚩尤の徒がいまの苗人であったのか、すべてその証拠はない。ただ古来伝わっている支離滅裂の文書から、共通と見なせる部分を抜き出して立てた議論であって、漢満関係のような明白なものはない。もし苗人に彼ら自身の史書があつて、疑う余地がなく彼らの事跡が記録されており、それにもとづいて復仇の軍をおこすのなら、私も先輩（先住者）に逆らおうとは思わない。斧の下に横たわるのみである。それはそれとして、漢人としては満族が仇である。苗

人の排漢にかかわりなく、漢人はまず排滿しなければならぬ。……もし、その「苗人の」文証が明確でなく、類比の結果にすぎないものならば、それは私の承認できないところである。それにまた……もともと漢族が苗民と混じって生活していて、苗民とはつきりとした区画がなく、区分はできないことがわかる。……漢人は苗民を討ちその土地を侵したなどなかったのである（章炳麟「定復仇之是非」一九〇七年九月⁸⁰）。

章炳麟はさらにまた、文献を再検討することによって、漢族に先立って苗族が中国本土にいたという証拠がないことを力説しようとした。

今日排滿を否定する者は、立憲派とはやや異なる。支那民族（漢族）は西方から来て苗人の地を略奪してこれを領有した。漢人が滿人を排除するのが当たり前と見なすのであれば、反対に苗人から見れば、自身（漢人）がまた排除されるべきであることになる、これゆえに復仇とは、私言であつて公理ではない、と言うのである。……私はこれに答える。漢族が西方から来たというのは、歴史的証拠があるわけではなく、ただ推測して得た考えであり、……滿洲が漢土を侵略したことがきちんと記録されるのとは異なるのである。大地の始まりの時、土地はあちこちで崩れ、洪水がその縁を浸し、このため人類が暮らしたのは、ただ中央の高原のみにおいてであった。漢族がパミール高原から来たことは、文献に根拠はないが、道理からして誤りではない。もしそうであれば、苗人は魚や亀と一緒に暮らしていたはずはないから、その先祖も西方の高原から来たはずである。両者の論理的証拠は同等であり、先にこの地にいたのが苗人なのか漢人なのかはそもそも明らかでない。さらに苗種の名前の由来について考えると、その説は様々である。長江以南の卑しい野蛮な族は、周から唐代まで通じて蛮と呼ばれており、……苗と呼ばれることはなかった。苗と呼ぶのは宋代からである。……こうした歴史的証拠から言うなら、

〔上古の三苗に関する記述を引き合いに〕苗族が来たのが漢族より先であるというのは、しかるべき証拠がない。漢族が来たのが苗族より先であるというのが、なお実質的である。……今、漢人が排滿するからには、苗人においては漢人が排されるべきだと言うのは、何の根拠があつてこの論難をするものなのか。

〔我々の言う〕排滿とは、その皇室〔清朝〕の排除であり、その官吏の排除であり、その士卒の排除である。そもそも編戸の民で従つて耕牧している滿人に、どうしてその腹に刃を突き立てようか。あるいはこう言うかもしれない。それならば〔滿人の〕政府を排すると言へば十分で、排滿と言うのはなぜか、と。これにはこう答える。我々が主張するのは、一切の政府の排除でも、一切の滿人の排除でもなく、排除したいのは滿人の漢〔の地〕にある政府である。だが、今の政府が滿洲に奪われていることは誰でも知っており、別に目標を立てるまでもないので、簡略化して排滿と言っているにすぎないのである（章炳麟「排滿平議」一九〇八年六月）⁸¹。

章炳麟が、漢族西來說とともに苗族西來說を新たに提出することによつて、漢族と苗族のどちらが先住者であるかについて問題を曖昧化させ、現今の苗族の民族名称を上古の三苗に結び付けることによつて主張されてきた従来の苗族先住説に対しては、史料を駆使して完全否定を図るという確固たる態度で臨み、一方でかつては「漢人はまず排滿しなければならぬ」と述べていた排滿論に対しては微妙な修正を加え、無政府主義者からの批判をかわそうとしたことが見て取れる。

(7) 清末苗族史論の歴史的意義

以上で論じてきたように、清末の在日中国知識人の間には、多民族国家を目指すべきか否かという国家構想をめぐ

る対立構造があつた。そして、国家構想をめぐる党派的対立は彼らの民族史論とも結び付き、そこには「同化」の論理と「排除」の論理をめぐる対立軸があつたのである。「同化」の論理において決まって引き合いに出されたのは苗族であつた。彼らは野鄙で頑陋な習俗に甘んじる人びとと見なされ、未来世界における漢族の位置付けと重ね合わせられたのである。一方、滿洲族は「排除」の論理において主たる攻撃の対象となつた。しかし滿洲族と苗族は、近代中国の民族論において、ともに漢族を映し出す鏡として不可欠な存在であつたことに変わりがない。

梁啓超と同様、革命派知識人の多くもまた日本を活動の舞台とし、日本の学術界の成果を貪欲に摂取した。民族学・民族史的知識も、彼らにとつては自らの理論武装の道具となり、漢族と滿洲族の系統としての異質性を強調して「排滿」を正当化し、君主立憲派の主張を批判するために活用されたのである。その中で主張された、黄帝に率いられた漢族の「西来」と先住民民族である苗族の駆逐という中国上古史の解釈については、明治日本の学術界からの直接的影響に加え、梁啓超や蔣智由など、君主立憲派の知識人による民族史論からの影響を多分に受けたものであつた。その点においては、二つの陣営は共鳴と連鎖を見せていたのである。

鳥居龍蔵による苗族調査の成果が相次いで発表されたのは、中国知識人の間で、それぞれの政治的思惑の中で苗族先住説と漢族西来説が受容され、それを援用した議論や批判の応酬が繰り返された、まさにこの時期であつた。鳥居の帰国後、ただちにその成果が参照され、各種の民族史論の構想に援用された背景には、中国知識人の間のこうした党派的対立構造があつたのである。

世紀末前後の苗族論は伝統的華夷思想に「優勝劣敗」式の進化論的解釈を加えたものでしかなかったが、やがて明治日本の歴史学界の影響を受けて民族史論の体裁を持つに至つた。そこに鳥居龍蔵の調査成果が加わつたことで、苗

族先住説に基づく苗族史論が定説化し、党派対立をこえて苗族の位置付けに関心が寄せられるようになる。歴史上の非「華族」への関心は、漢族の多系性を主張する梁啓超の民族史論を形作った。さらに、その後の革命派の「排滿」論の高まりは、外来説を自己批判した蔣智由による漢狄同祖Ⅱ多系進化論の出現を促した。民国期に定型化する非漢族を包括した「中華民族」史論の出現までは、あと少しの飛躍を残すのみとなったのである。

君主立憲派の民族史論のこのような発展の軌跡と比較すると、革命派の民族史論は、漢族西來說と苗族先住説という二本の柱に縛られて、自律的に発展を遂げる余地はそもそも乏しかった。それを再考するきっかけは、無政府主義者からの問いかけとして、外から与えられたのである。そこで苗族先住説が新たな党派対立の争点となり、結果的に「排滿」論の急先鋒であった章炳麟も自説をトーンダウンさせる。そして章炳麟が『民報』の編集から離れると、革命派全体で「排滿」主義に立つ政治的主張は低調になり、苗族先住説への関心も、この論争以後、党派を問わず、急速に低下していったと見られるのである。

辛亥革命を達成した時に、旧革命派を中心とする人々によって選ばれたのが、かつて梁啓超らが構想し、革命派から激しい批判を受けた、滿洲族を包摂する多民族国家としての国家体制であったことは、歴史の皮肉なめぐり合わせと言うべきである。そして、新たに建国された中華民国では、漢・滿洲・蒙古・回・チベットの「五族共和」が政治的スローガンとなった。結局、苗族は「六族」目の地位を獲得することはなかったのである。

その背景に、辛亥革命の過程における清朝側との妥協や外蒙古独立の動きなど、北方を重視せざるを得ない政治環境があったのは言うまでもない。しかし同時に、以上で論じたように、それに先立つ時期の民族史論の展開において、中国知識人の中で苗族に対する評価と関心が相対的に低下していく状況があったという点も、見過ごせない事実であ

ろう。

清末における多民族国家建設のは非をめぐる議論は、満洲族に統治される清朝の下で、伝統的華夷思想による民族観が近代的に再編される過程で起きた、複雑な党派対立を反映した中国近代特有の歴史的現象であった。以上の議論から見れば、その環境を民族史論という側面から用意したものの一つは、苗族先住説だったと言いうる。清末において苗族史論が果した歴史的意義は、まさにこの点にあるのである。⁸²⁾

〈以下、再続篇〉

【註】

(44) 拙稿『苗族史の近代——漢族西來說と多民族史観』『北海道大学文学研究科紀要』一二四、二〇〇八年。前稿で紹介した近代西欧と日本の多様な苗族史論を、論者との対応関係に即して整理すると以下ようになる。

(1) 一元論（漢苗同源論）

(1a) 漢族西來說＋苗族西來說（レック一八六五年）

(1b) 漢族・苗族華南先住説（高橋順次郎一八九八年）

(2) 多元論（漢苗非同源論）

(2a) 漢族西來說＋苗族先住説（エドキンス一八七二年、ラクペリー一八八〇・八五年、那珂通世一八八八年、市村瓚次郎一八八九年、桑原隲蔵一八九六・九八年、白河次郎一九〇〇年、鳥居一九〇二年、田能村梅士一九〇四年、久米邦武一九〇五年）

① 漢族「支那西（北）方」起源説（那珂・市村）

② 漢族「中央アジア／崑崙」起源説（桑原・田能村・鳥居）

③ 漢族「西アジア」起源説（ラクペリー・白河）

(2b) 漢族起源地保留＋苗族先住説（藤田豊八一八九六年）

(45) 韋廉臣『古教彙參』益知書局（上海）、一八八一年（上海広学会、一八九九年再刊）。この内容に関連する旧約聖書の記述は、関根正雄訳『旧約聖書 創世記』岩波文庫、一九五六年参照。韋廉臣（Alexander Williamson）はスコットランド人の宣教師で、上海での益知書会、広学会などの設立に参与した（熊文華『英国漢学史』学苑出版社、二〇〇七年参照）。

(46) 前掲の引用文では、中国人（漢族）とエジプト人の同祖説に基づいて、両地の文明的要素の相似を説明している。これは、十八世紀においてすでに西欧の知識人たちの間で流行していた「中国文化エジプト起源説」と関連するものである（「イエズス会の宣教師パランナン師が科学学士院ドルトゥー・ド・メーラン氏にあてた書簡（一七三五年・北京）」および「イエズス会の宣教師パランナン師の、フランス学士院会員で、王立科学学士院の終身書記であるドルトゥー・ド・メーラン氏にあてた書簡（一七四〇年・北京）」矢沢利彦編訳『中国の医学と技術——イエズス会士書簡集』平凡社、一九七七年所収）。関連する議論は前掲注8前嶋信次「漢民族のオリエント起源説」を参照。

(47) 梁啓超は一八九六年に発表した『西学書目表』の中で本書を挙げ、「言印度・埃及・希臘旧教、多可觀」と注釈している（『飲冰室合集集外文』北京大学出版社、二〇〇五年所収）。

(48) 梁啓超「三十自述」『飲冰室文集』十一、一九〇二年。

(49) 劉師培『劉申叔先生遺著』一九三四年（一九六五年大新書局影印。著作刊行時期については、万仕国『劉師培年譜』広陵書社、二〇〇三年、および無記名『劉師培著作繫年目録』『劉師培史学論著選集』上海古籍出版社、二〇〇六年参照）。

(50) 梁啓超「論中国宜求法律之学」『湘報』五、一八九八年三月、および「變法通議（三）論變法必自平滿漢之界始」『清議報』一、一八九八年十二月。前者については、石川禎浩「近代東アジア『文明圈』の成立とその共通言語」『京都大学人文科学研究所七十年記念シンポジウム論集 西洋近代文明と中華世界』京都大学学術出版会、二〇〇一年、および區建英「清末の『種族』論とナショナル・アイデンティティ」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』十、二〇〇七年の関連する議論を参照。梁啓超の論著の年代については、李国俊『梁啓超著述繫年』復旦大学出版社、一九八六年参照。

(51) 陳天華「敬告湖南人」『蘇報』二四六九、一九〇三年五月（野村浩一訳「敬んで湖南人に告ぐ」『中国古典文学大系』五八 清末民国初政治評論集』平凡社、一九七一年所収）。

(52) 湖南省哲学社会科学研究所古代近代史研究室校注『宋教仁日記』湖南人民出版社、一九八〇年。訳書として松本英紀訳『宋教仁の

日記「同朋舎出版、一九八九年がある。郷（刀）安仁については、飯倉照平「雲南と日本人」「雲南の民族文化」研文出版、一九八三年、横山廣子「少数民族の政治とディスコース」「岩波講座 文化人類学」五、岩波書店、一九九七年、および武内房司「清末雲南タイ系土司の近代化ヴィジョン」「民族表象のポリティックス」風響社、二〇〇八年を参照。

(53) 梁啓超「中国史叙論」「清議報」九〇、一九〇一年九月。

(54) 当時梁啓超が、那珂「支那通史」、市村ほか「支那史」、桑原「中等東洋史」など明治日本の東洋史学者の論著を高く評価していたことに加え、白河次郎ほか「支那文明史」の漢族西來說にも目を向けていたことについては、梁啓超「東籍月旦」「新民叢報」十一、一九〇二年七月を参照。梁啓超をはじめとする同時代の多くの中国知識人による自民族史像の構築に際し、白河「支那文明史」がとくに強い影響を及ぼしたことについては、前掲注1石川禎浩「二十世紀初頭の中国における『黄帝』熱」を参照。梁啓超による近代化構想と中国史論との関係性については、竹内弘行「中国の儒教的近代化論」研文出版、一九九五年を参照。

(55) 梁啓超「新史学 四 歴史と人種之関係」「新民叢報」十四、一九〇二年八月。

(56) 梁啓超「政治学大家伯倫知理之学説」「新民叢報」三二、一九〇三年五月。梁啓超のこの議論に関連するブルンチュリ(U. K. Bruntsch)の学説、すなわち国家有機体説は、当時の日本の政治学界に広く受容されていた。日本語訳には、平田東助訳「国家論」二、一八八四年、無記名訳「民族的の建国並びに族民主義」「独逸学協会雑誌」四〇・四一、一八八七年(田中彰ほか編「日本近代思想大系」十三 歴史認識)岩波書店、一九九一年に再収録)、および吾妻兵治訳「国家学」静思館、一八九九年があり、梁啓超は吾妻訳書を参照したものと推測されている(巴斯蒂[Mariame Bastid-Bruguiere]「中国近代国家観念溯源」「近代史研究」一〇〇、一九九七年、および狭間直樹「中国近代における帝国主義と国民国家」前掲注50「西洋近代文明と中華世界」所収)。

(57) 「拒俄運動」と民族主義的言説との関係性、その変化については、前掲注5斉藤道彦「中国近代と大中華主義」参照。

(58) 馮自由「章太炎与支那亡国紀年會」「革命逸史 初集」一九三九年、および嚴安生「日本留学精神史」岩波書店、一九九一年参照。

(59) 観雲(蒋智由)「中国史上旧民族之史影」「新民叢報」三一、一九〇三年五月。

(60) 前掲注33鳥居「人類学上取調報告」。

(61) 蒋智由論文の刊行時期(一九〇三年五月)と、「世界最古の刑法」の刊行時期(一九〇四年二月)とが整合しないことについては、なおも疑問を残す。蒋智由論文が掲載された『新民叢報』三十一号は、一九〇三年七月刊の『東邦協会会報』一〇一号に受贈書とし

て記録される（狭間直樹編『共同研究梁啓超』付録二、みすず書房、一九九九年）。蒋智由は田能村が单著とする前の論文や草稿を目にした可能性が考えられようか。蒋智由については、丁文江ほか編・島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』二、岩波書店、二〇〇四年参照。

(62) 波公（氏名不詳）「調査貴州苗族之情形」『新民叢報』五三、一九〇四年九月、および筑西SCY生（氏名不詳）「中国原始民族之現狀」『新民叢報』六〇、一九〇五年一月。

(63) 梁啓超「歷史上中国民族之觀察」『新民叢報』六五・六六、一九〇五年三、四月。

(64) 前掲注58馮自由「章太炎与支那亡国紀年會」、および嚴安生『日本留学精神史』。

(65) 湯志鈞編『章太炎年譜長編』中華書局、一九七九年。

(66) 前掲注58嚴安生『日本留学精神史』、前掲注3坂元ひろ子『中国民族主義の神話』、および松田京子『帝国の視線』吉川弘文館、二〇〇三年。

(67) 鄒容『革命軍』陰曆一九〇三年三月（近藤邦康訳『革命軍』『原典中国近代思想史』三、岩波書店、一九七七年所収）。

(68) 革命派知識人による漢族西來説的民族史論については前掲注3諸論文を、「排滿」論については注2諸論文、石川禎浩「辛亥革命時期的種族主義与中国人類學的興起」前掲注3『辛亥革命与二十世紀的中国』所収、および王春霞『「排滿」与民族主義』社会科学文献出版社、二〇〇五年を参照。

(69) 陳天華『警世鐘』一九〇三年秋（劉晴波ほか編『陳天華集』湖南人民出版社、二〇〇八年所収）。本論文の和訳と陳天華のこの議論については、吉澤誠一郎『愛国主義の創生』岩波書店、二〇〇三年を参照。

(70) 章炳麟「序種姓」『煊書（重訂本）』一九〇四年六月（章炳麟『章太炎全集』三、上海人民出版社、一九八四年所収）。章炳麟が漢族西來説を信じた背景が、日本の史学界の影響にあったという推論は、早くに朱希祖が指摘するところである（駁中国先有苗種後漢種説『北京大学月刊』一一、一九一九年）。清末の日本滞在期における章炳麟による日本の史学界認識の一端は、「与梁啓超」『新民叢報』十三、一九〇二年八月を参照。章炳麟は疑古思想を持っており、このことが伝統的理解を払拭して、西來説を受け入れる素地になったと考えられるかもしれない。章炳麟の疑古的傾向については、「与錢玄同」一九〇六年（馬勇編『章太炎書信集』河北人民出版社、二〇〇三年所収）を参照。

苗族史の近代（統篇）

- (71) 管見では、以上のほかに、劉師培の『中国民族志』（陰曆一九〇三年十〔十一？〕月刊）および『攘書』（陰曆一九〇四年三〔四？〕月刊）、陶成章『中国民族權力消長史』（一九〇五年一月刊）、宋教仁『漢族侵略史・叙例』『二十世紀之支那』一（一九〇五年六月刊）などにおいて、相似する議論を確認できる。
- (72) 観雲（蒋智由）「中国人種攷」『新民叢報』三五〇六〇、一九〇三年八月〜一九〇五年一月。
- (73) 例えば、宋教仁の一九〇六年十二月二十九日の日記（前掲注52）には、「中国人種攷」を読んだことが記録される。
- (74) 蒋智由「變法後中国立国之大政策論」『政論』一、一九〇七年十月（張枬ほか編『辛亥革命前十年間時論選集』二、三聯書店、一九六三年所収）。
- (75) 観雲（蒋智由）「説歷史上中国民族之觀察系論」『新民叢報』七三、一九〇六年一月。
- (76) 蒋智由が身を置いた同時代の明治日本でも、坪井正五郎や鳥居龍藏に代表されるような、外からの民族移動と先住民族の排除という説明を基調とする民族史論が主流であった。日本国内でこれらが批判にさらされ、土着自生を基調とする民族史論がそれに取って代わるのは、大正から昭和初年にかけてのことである。その点において蒋智由によるこの議論は、東アジア的に見ても先駆的意義を持つものである。近代日中両国の民族史観の変遷過程の比較については、拙稿「原住民族史観対中日両国近代史学發展的影響」『第四屆文化交流史・『文化的衝擊と変遷國際學術研討会』會議論文集』輔仁大學歴史学系、二〇〇八年を参照。
- (77) 梁啓超「雜答某報」『新民叢報』八四、一九〇六年八月。
- (78) 志達「保滿与排滿」『天義報』三、一九〇七年七月（前掲注74張枬ほか編『辛亥革命前十年間時論選集』所収）。
- (79) 民（褚民誼）「伸論民族・民權・社会主義之異同、再答來書論」『新世紀』発刊之趣意『新世紀』六、一九〇七年七月（前掲注74張枬ほか編『辛亥革命前十年間時論選集』所収）。
- (80) 章炳麟「定復仇之是非」『民報』十六、一九〇七年九月（西順蔵訳「復仇の是非を定める」『中国古典文学大系』五八 清末民国初政治評論集』平凡社、一九七一年所収）。
- (81) 章炳麟「排滿平議」『民報』二二、一九〇八年六月。
- (82) 本文で述べたように、この時期、在日の中国知識人の間で民族問題への関心が著しく高まったが、それは当時の本学への中国人留學生においても同様であった。内藤虎次郎（湖南）は、盛先覺という人物について、以下のように回顧している。

支那が現に遭遇して居る問題の中、頗る困難な者の一は領土問題である。革命軍の初めて起つた時、其の中心たる人々は、まだ此の問題に注意する程の暇も無かつた時に、一人の年少の学生があつて、早くも此に着眼した。其人は、湖南の出身で盛先寛と云ふ、札幌の農科大学の留学生であつたが、清朝の末年からして、既に支那の異民族統治問題に注意して、独学で蒙古語などを研究した。革命乱の起ると同時に支那へ歸つたが、革命軍が十分に成功しない中に、早くも此問題の為に一度日本へ来て、自分を訪問して、此領土問題に就て、どう処分したら宜からうと云ふことを相談した。勿論此の人の考は此の革命乱の為に、從來支那が異民族を包含した絶大の領土を有つて居るのを土崩瓦解さしてしまふのが残念だから、其の統轄を引続けたい、それに就いては、どうかして西藏の達賴喇嘛に關係を附け、其の力でもつて西藏並に蒙古問題の処分をしたいと云ふので、達賴喇嘛に会ふが為に西本願寺の法主の紹介を得たいと云ふ考であつた。……それが国へ歸つた頃、果して其の主張が行はれたかどうか知らぬけれども、五大民族の共和と云ふ議論が支那に於て起つたのである（内藤虎次郎「領土問題」『支那論』文会堂書店、一九一四年）。

北海道大学文学書館に現藏される盛先寛の入学願書（『明治四十二（一九〇九）年（東北大学農科大学（在札幌、現北大農学部）農学実科入学志願書』文書冊所収）によれば、湖南省長沙府善化県出身の湖南人であり、来日後、東京・京都・鹿児島での修学を経て、一九〇九年に入学志願したことが分かる。一九一一年七月の時点では農学実科の第三年級に在学していたことが確認されるが（『東北帝国大学農科大学一覽』一九一一年）、卒業生名簿に名前が見当たらず（『北海道帝国大学一覽』一九三七年）、卒業を待たずして辛亥革命さなかの母国に歸つたと見られる。同年陰曆十月十七日に、彼は上海から梁啓超にあてた手紙の中で、革命下の江南の近況と合わせ、帰国に際して下関で西本願寺宗主の大谷尊由と面会したことを報告している（前掲注61島田虔次編訳『梁啓超年譜長編』三を参照）。内藤の記述の正確さを裏付けるものである。中国多民族国家論の先駆者の一人が、札幌で何を学び、どのように母国の情報に接し、また本稿で論じた党派間の民族史論争をいかに見つめ、帰国後いかなる活動を展開したのか、今後検討すべき課題である。